

# news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA

2018 095



佐伯祐三 《ポスターとロウソク立て》 1925（大正 14）  
「産業と美術のあいだで 印刷術が拓いた楽園」展より

# 産業と美術のあいだで 印刷術が拓いた楽園

会期：2018(平成30)年4月14日(土)～6月24日(日)

美術の表現は、美術の周辺からしばしば力を得ています。それは、私たちの生活の実用的な需要に応える産業であることも少なくありません。中でも印刷術は、美術の表現に最もよく影響を与えた産業技術のひとつと言えるでしょう。

日本は、主に木版の技術により、古くから印刷文化を誇る国です。高度に洗練された浮世絵や書籍、身の回りの品々までが作られてきました。明治に入って、文字の印刷には活版が、図版の印刷には銅版、木口木版、石版の技術が西欧からもたらされて近代的な印刷産業が発展しました。ひとりひとりの生活に入り込んだ印刷物は、新鮮な視覚体験をもたらし、また産業としての印刷の担い手たちの中にも、実用的な需要に応える一方で、印刷技術の中にある版の創造的な側面に着目する人が現れました。

今回の展覧会では、印刷術というひとつの産業が、いかに私たちの美術の表現を豊かで新鮮なものにしてきたかを、印刷資料、版画、絵画など195点を通してご覧いただきました。

世界にただひとつであることが価値の一部でもある美術作品の中には、しばしば大量に作られ、配布される印刷物が入り込んでいます。例えば佐伯祐三の作品には、佐伯がフランスで手にとり、また

毎日のように目にしていたポスターが描かれています。《ポスターとロウソク立て》(表紙)は、展覧会のポスターを下敷きにロウソク立てと赤鉛筆が置かれ、《広告のある門》(図1)には、シャンソン歌手のダミアの名前があるものをはじめ、大判のポスターが直接に壁に貼られ、雨風に破れ、はがれかけたところにさらに重ねて貼られている様子が見られます。

今でもパリの町中で見られるポスターには大きなものが多く、トゥールーズ=ロー・トレックの《アリストディ・ブリュアン》(図2)くらいのサイズがよく掲示されています。高さ140cmほどもあるこの作品は立派な石版画ですが、当時は文字が入れられて、歌手アリストディ・ブリュアンのポスターとして使われていました。肩越しにこちらを見やる彼のポーズと、赤と黒の単純な色面構成、太い輪郭線が印象的です。日本の浮世絵の表現にインスピレーションを受けたものと言われています。

モダニズムの画家と呼ばれた高井貞二の作品には、さまざまなモダン・ライフの意匠が描かれます。《感情の遊離》(図3)にも、1930年代の日本でも流行した金属パイプで作られた家具や、バウハウスの建築を思わせる写真が掲載された雑誌のページをはじめとする複数の洋雑誌らしき印刷物が描かれています。

一方、浜地清松の《赤い帽子》(図4)には、

碧の眼の西洋人モデルの後ろに浮世絵が貼られています。これらは、世界中の多様な文化を貪欲に吸収していた、当時のパリらしい趣味と日本人である浜地の出自を感じさせます。

こういった画面の中に描かれた多様な印刷物は、そのときどきの求めに応じて制作されたものであり、だからこそ時代の空気を強く感じさせてくれます。

パリには優れた印刷工房がいくつもあり、ポスターだけでなく、多くの作家たちがそこで版画を作っていましたが、日本の印刷工房で作られていた実用的な印刷物、例えば地図や、本来美術作品としては作られていない、今でいうポスターやちらしにあたる絵びら、引札、そして新聞などの附録にも心を引きつける表現が見られます(図5～7)。それらは、ただ実用的な印刷物を作る、あるいは絵画の複製をする、という「仕事」を超えて、美しいものを求めて制作していた技術者たちの姿勢を確かに示しています。

現在なら、写真を使った製版法で簡単にコピーできますが、これらが制作された100年ほど前には、複製するには人の眼と手を頼りにするしかありませんでした。例えば、合田清の『東京朝日新聞』附録(図6)は、木口木版という技法で作られています。一般的な木版画が木の幹を



図1 佐伯祐三《広告のある門》1925(大正14)



図2 アンリ・ド・トゥールーズ=ロー・トレック  
《アリストディ・ブリュアン》1893(明治26) 個人蔵



図3 高井貞二《感情の遊離》1932(昭和7)



図4 浜地清松《赤い帽子》1928(昭和3)

垂直に切り出した板に彫られる板木版であるのに対して、木口木版は木の幹を水平に切って版材を得ます。ツゲや椿など、固くしまった木質の材に、細い鑿で彫っていくことで、緻密な表現が可能になります。画面をよく見ると、細い線の束が、陰影やボリューム、濃淡を表現していることがわかります。

石版は、明治になって本格的に西欧からとりいれられた複製技術です。粒点で製版した色版を重ねることで、豊かな色彩再現を可能としていました。和田英作が大正天皇と英國、ロシア、フランスの元首の会談を描いた、『大阪朝日新聞』の附録(図7)は、4名の技術者が筆で点々を描いて12枚の版を製版し、重ねて刷りあげたものです。画面をよく見ると、それぞれの版を重ねることで色彩だけでなく、量感までも点描で表現されていることに驚かされます。現在、多くの色刷りの印刷物は、写真の技術を使い、黒、黄、赤、青の4色に分解をした版を重ねて作られます、この技術が完成されるまでには、重ね合わせるべき色の版を人の手で分けて作っていた歴史があったのです。

こうした印刷産業の中から、美術作品の制作を目指す人たちも現れました。もっともわかりやすいのは、謄写版工房で働く人たちが試みた表現です。「ガリ版」という愛称で知られる謄写版は、薄い和紙にロウをひいた「原紙」を龜の上に



図5 鈴木菴齋「蝙蝠傘錦フラン子ル卸商 南為太郎 引札」  
1887(明治20)頃 個人蔵



図6 合田清(生巧館)  
『東京朝日新聞』  
第2125号附録  
円山応挙作品複製  
1892(明治25)個人蔵



図7 和田英作『大阪朝日新聞』第12555号附録  
1916(大正5) 個人蔵



図8 若山八十氏『変ないきもの』1961(昭和36)

おいて、鉄筆で文字や絵を書く簡易な印刷技術で、今でいうコピー機のはたらきを担っていました。その謄写版の技術で暮らしを立てていた若山八十氏(図8)は、謄写版で版画を作る方法を模索し、周囲の若い人たちに呼びかけて「藝土会」というグループを作りました。その集まりでは、会員のそれぞれが謄写版で作った習作を持ち寄って交換し、合評をしていました。同時に一般の公募展にも出品し、自分たちが身につけた技術の可能性を追求していました。

このように、印刷物の製作を通して洗練されてきた木版、石版、銅版などの技術は、生産効率を高めるために新しい技術にとって替わられた一方で、美術作品の制作方法に取り入れられました。現在、版画作品の技法の多くは印刷術に由来し、板木版や木口木版などの凸版も、銅版画をはじめとする凹版も、謄写版やシルクスクリーンなどの孔版も学校で学べるようになりました。一度途絶えた技術も、残された資料を見てその魅力にひきこまれた作家たちが発掘し、いま見ら

れる多彩な表現方法が実現されていきました。

現在の完成された技術は、100年前の人たちの目標だったことでしょう。しかし完成された印刷術とは異なる表現力が過去の印刷物にはあります。見るほどに、とても人間業とは思えない技術が駆使され、正確で、精密であると同時に、人の手の温かみさえも感じられます。そして、このような印刷物が気になって、ずっと大切にとっておいた人がいるからこそ、いま私たちはそれらを見ることがあります。だれかにお金で価値を保証して貰わなくても、私たちは、自分にとって価値のあるものを見つけて良いのです。現在の美術表現のもとには、その技術を印刷産業の中で育てていった人たちがいたことを覚えていると、創造の現場が身近に感じられ、美術が日常の中からも生まれてくることを実感できるはずです。さらに、現代の技術がこれから美術に与える新しい表現を予期することもできるでしょう。それは、歴史を知ることとおなじくらい、心が躍ることではないでしょうか。

(植野比佐見)

# 島根県立石見美術館企画展

## 「モダン・アートに出会う 5つの扉—和歌山県立近代美術館名品展」の開催について

さこんじゅう なおみ  
島根県立石見美術館 専門学芸員 左近充直美



グラントワの外観。回廊式の建物で、水盤になっている中庭広場が、周囲の景観を映し出します



会場入口

島根県立石見美術館では、2018(平成30)年4月21日(土)から6月17日(日)まで、和歌山県立近代美術館の所蔵作品のなかから、日本近現代の絵画作品を中心に紹介した企画展を開催いたしました。「なぜ和歌山の作品を島根で?」「そもそも石見って島根のどこ?」などなど、様々な疑問が生じることと思います。今回は当館の概観と、展覧会開催の経緯について、少しお話しさせていただきます。

和歌山県は紀伊半島の南西部にあり南北に広がる県ですが、島根県は日本海に沿って東西に長い県です。東側は鳥取県、西側は山口県に隣接する県といえば、およその位置がわかるでしょうか。島根県立石見美術館(「石見」は「いわみ」とよみます)は、島根県西部地域の益田市にある美術館です。音楽ホール「島根県立いわみ芸術劇場」との複合施設で、美術館とホールとを合わせて「島根県芸術文化センター」といい、愛称「グラントワ」の名で地域の人々に親しまれています。「グラントワ」とは、フランス語で「大きな屋根」を意味し、四方を囲む大きな屋根が特徴的な建物です。この屋根と壁には、石見地方の伝統的な石州瓦が使われており、赤瓦の色合いが町並みに映え、天気の加減や時刻によって、その色味が微妙に変化するなど、美しい外観を呈しています。開館して今年で13年目を迎ましたが、ようやくこの呼び名が県内各所に浸透してきたなという実感があります。

島根県は、総延長1,027kmと、長大な海

岸線が続く一方、県土の9割を山地と丘陵地が占めています。海と山に囲まれ、自然の景観の美しさと豊富な資源に恵まれているところは、和歌山県とともに似ている点ではないかと思います。こうした地形的特徴の類似性もあってか、いわゆる「街道」が含まれる世界遺産は、国内では和歌山の「紀伊山地の霊場と参詣道」(2004年登録)と、島根の「石見銀山遺跡とその文化的景観」(2007年登録)の二例のみで、現時点では他にありません。また、『古事記』にまで遡る古代からの歴史的な背景や、山深い土地に息づく自然信仰、その祭祀・靈場が原初の形を残して存在している点など、両県には多くの共通点が見いだせます。距離こそ遠く離れていますが、どこか不思議な「ご縁」で結ばれている、と言ってよいのではないでしょうか。

展覧会を開催することになった経緯も、まさしくこの「ご縁」から始まりました。2018(平成30)年2月10日(土)から3月25日(日)まで、和歌山県立近代美術館で当館のコレクションの柱のひとつ、明治期の水彩画家、大下藤次郎の作品を紹介した「明治150年記念 水彩画家・大下藤次郎展 島根県立石見美術館コレクション」を開催していただきました。両館は今から12年前の2006(平成18)年、企画展「森鷗外と美術」で共に巡回を組んで展覧会を開催した経緯があり、学芸員同士の交流も続いていました。島根県石見地域出身の文豪・森鷗外とゆかりの深い、大下藤次郎の作品を和歌山で紹介していただくこ

とは、当館にとっても意義の深いことで、自然な流れで作品の貸出が決まりました。そして、今回の「モダン・アートに出会う 5つの扉—和歌山県立近代美術館名品展」は、その流れの中で、今度は当館から協力をお願いし、開催が決定したものです。国内でも屈指の近現代美術のコレクションを収蔵していることで知られる、和歌山県立近代美術館の作品を一括でお借りできることは、当館にとって、またとない素晴らしい機会でした。

このように、地域の公立美術館同士が互いに連携し合い、双方の館のコレクショ



展覧会のポスター



和歌山県立近代美術館にて 両館の学芸員で作品の状態をチェック

ンの特徴を活かしながら、ひとつの展覧会を組み立てる、というのは従来も行われてきたことです。しかし、大量に所蔵作品を館外に貸出すということは、実はそれほど容易な事ではありません。例えば出品作品を決める時、展示期間制限のある作品を含め、館内での年間展示計画との大掛かりな調整が必要になります。また、対外的な面でも他の館から寄せられる貸出依頼との調整が生じます。作品選択に関わる調査、作品の状態チェック、移送のための下準備、梱包時の立ち合い、展示の立ち合いなどの対応は、開催日前日まで長期で多岐にわたり、問題が生じれば、それらをひとつずつクリアしていかねばなりません。今回の「モダン・アートに出会う 5つの扉」展の開催に関しては、

当方のリクエストに応じて、特に選りすぐりの名品の出品を承諾していただきました。ひとえに、和歌山県立近代美術館の皆様のご理解と、担当の学芸員、宮本久宣氏のご尽力の賜物です。改めて深く御礼申し上げたいと思います。

そうして様々な過程を経て、半年以上の月日をかけて出品リストを決定し、開催に向けての準備を積み重ねていきました。最後に、そのなかのひとつ、展覧会のタイトルがどうやって決まったのかについてお話しします。当館では、開催までのところで「広報会議」を幾度か開き、展覧会の良さを世間にどうアピールしていくかを話し合います。企画展の性質に合わせて、印刷物の枚数や広報手段、告知の強化地域も変えています。担当学芸員もそうでない人も、各自でアイデアを練り、会議で様々な案を提示します。タイトルもその議題のひとつで、時間をかけて議論した末につけられたものでした。今回の展覧会は、島根ではおそらく行ったことがある人もそう多くはないであろう、和歌山県の印象をまず前に出したほうがよいという意見が多かったため、和歌山のイメージを示す言葉や情報をかき集めて提示し、それをヒントにタイトル案を募りました。その結果、出た案はざっと32個。数は多いですが、中身は玉石混交。「????」なものもありました。今だから言える、ちょっと面白い例をあげましょう。「あさもよし和歌山展」(※「あさもよし」は紀伊の枕詞)「レジェンド・オブ・ワカヤマ展」「ウミニモマケズ ヤマニモマケズ展」「紀の国の名宝展」「紀伊を、見る展」…この辺でうすうす気が付くと思いま

すが、そうです「和歌山県」にこだわり過ぎて、当初案はかなり迷走していたのでした。そもそも私の説明がまづかったのです。美術館の作品や、出品傾向の魅力に焦点を当てるべきで、和歌山について知る展覧会ではありません。そこで一旦仕切り直し、「和歌山県立近代美術館のコレクションにはじめて出会う」という意味が込められたタイトルはないかを協議しました。「モダン・アートに出会う」という言葉は、その過程で出てきた言葉です。さらに「5つの扉」とは、テーマごとに展示構成が5つの章に分かれ、扉を開くように会場の先に進んでいくと、知らぬうちにモダン・アートの魅力にはまっていく、という本展のコンセプトを扉に例えたものです。島根の人にただ同館の名品をズラッと並べて見せるのではなく、著名な作家も、この機に初めて知る作家も、特に線引きすることなく、作品から直に受ける、その最初の「出会い」を新鮮に受け止めてもらいたい、という想いがありました。結果的にそれがうまく表されたタイトルになったと思っています。

本展のことを語ると、特に意図せず「ご縁」と「出会い」という言葉が出てきましたが、展覧会が始まる前も、会期中も、そして終わった後も様々な形でこの「ご縁」と「出会い」に遭遇することができました。そのことに深く感謝したいと思います。

**モダン・アートに出会う 5つの扉**  
和歌山県立近代美術館名品展  
会 期：2018（平成30）年4月21日（土）－  
6月17日（日）  
主 催：島根県立石見美術館、しまね文化振興財団、日本海テレビ、中国新聞社  
特別協力：和歌山県立近代美術館  
後 援：芸術文化とふれあう協議会



内覧会でのテープカットの様子



内覧会でのギャラリートークの様子



和歌山県立近代美術館 山野館長の記念講演会の様子

# 出雲の神の縁結び？ コレクションの交換展をめぐって



この春、島根県立石見美術館（以下、石見美術館）と当館で、コレクションの交換展\*を行いました。今号のニュースでは、石見美術館の担当者であった左近充直さんに「モダン・アートに出会う 5つの扉」展開催の経緯を、主催側の立場でご執筆いただいています。筆者は今回、主催側、協力側の担当者として、ふたつの展覧会に連続して関わりました。その立場から、コレクションの交換展について書き記したいと思います。

まず当館での「水彩画家・大下藤次郎展」は、今年2018(平成30)年が、明治維新からちょうど150年を迎える年であることから、明治時代にちなんだ美術を紹介できないかという構想から始まりました。考えをまとめるなか、一昨年の「動き出す！絵画」展でキーパーソンとした北山清太郎が、明治末の一時期、大下の元で仕事をしていたことが頭に残っていました。明治期に活躍した大下の展覧会は時宜にかないつつ、一昨年度の企画とのつながりを生むとも考えました。そこで作品と資料をまとめて所蔵する石見美術館に出品のご協力をお願いしたところ、ご快諾いただき、展覧会が実現に向けて動きだしました。当初は当館からの一方的なお願いだったところ、早い段階で石見美術館から当館コレクションによる展覧会開催の打診を受け、交換展というかたちになることが決りました。

そもそも各地の美術館にはそれぞれ活動方針があり、それに沿って展覧会や作品の収集が行われます。活動方針はいくつか設けられることがほとんどですが、

その館が立つ場所の歴史や地域性がほぼ必ず重要なテーマとなります。例えば当館で言えば、和歌山県が明治時代以降に多数のアメリカ移民を輩出し、その中から画家となる人物が生まれたことから、石垣栄太郎を中心とした渡米画家が作品収集や展覧会活動の柱のひとつとなっています。石見美術館が大下の作品と資料を一括収蔵しているのは、同館の立つ石見地域にある津和野が文豪・森鷗外の生地であり、ゆかりの美術家たちの作品紹介や収集が活動方針のひとつとなっているからです。そのため、それぞれの活動方針によって形づくられた他館のコレクションをまとめて紹介することは、各館が活動を行う場所の地域性や歴史をも紹介することにつながります。

同時に展覧会は一方通行ではなく、借り先がその地域にいるからこそ気づいたことや、関心を見いだせたことを調査し、貸した側に作品や資料についての新しい情報を提供する場ともなります。例えば、「水彩画家・大下藤次郎展」では、大下の旧蔵資料を事前に調査した上で借用し、和歌山の人々と大下のつながりを紹介しました。

また石見美術館でのコレクション展については、開催地が島根県ということで、出品作品に松江市出身の西博民の作品が加わりました。1928(昭和3)年に和歌山県師範学校へ赴任した西は、自身も帝展で入選を果たす一方、数多くの生徒たちを美術の道へ導いた、優れた美術教師であったようです。既にいくらか情報はいただけたのですが、生地でなにか情報が

出てくる可能性もありますし、会期終了後にも予想外の成果が出てくることを期待しています。

美術館のコレクション展というと、近年では海外にある美術館のコレクション展が盛んに行われます。国内外問わず、そこに行かないとい見ることができない優れた作品を、近くの場所で見ることができるという点では、確かによい機会であるでしょう。ただし借用したコレクションに対して、展覧会を開催した館ならではの貢献がなければ、展覧会は一方通行で終わってしまいます。コレクションについて知ってもらうことだけでも所蔵館にとっては意味のあることとも言えるのかもしれません、作品や作者について開催地域に根ざした新たな知見を示す、あるいは開催館ならではの解釈によってコレクションに新しい魅力や価値を提供する、といったお返しができれば、より良い「縁」が結ばれる機会になるでしょう。

といえば、島根県と言えば出雲大社。出雲大社は縁結びの神様としても有名です。「出雲の神の縁結び」と言いますが、今回は神様が与えてくれた縁を結ぶことができたよい機会だったと思います。

(宮本久宣)



「水彩画家・大下藤次郎展」会場（和歌山県立近代美術館）  
撮影：長岡浩司



「モダン・アートに出会う 5つの扉展」会場（島根県立石見美術館）



\* 展覧会名、会期は以下のとおり  
「明治150年記念 水彩画家・大下藤次郎展 島根県立石見美術館コレクション」 2018年2月10日—3月25日 和歌山県立近代美術館  
「モダン・アートに出会う 5つの扉 一和歌山県立近代美術館名品展」 2018年4月21日—6月17日 島根県立石見美術館

# いわBee誕生！「こども美術館部 in 石見」



2016(平成28)年から隔月で実施している小学生対象の鑑賞会「こども美術館部」。自分の考えをみんなに伝えたり、ちょっとした道具を使って鑑賞したり、つまりは手と口を動かして美術館で「遊ぶ」経験を通して、美術館を楽しむ方法を学ぶ活動です。展示室で楽しく飛び回る子どもたちをイメージして、「わかBee」と名付けたハチのキャラクターをマスコットにしています。今回、島根県立石見美術館(以下、石見美術館)での企画展「モダン・アートに出会う 5つの扉」展では、作品に加え、この「こども美術館部」の活動も「出張」することになりました。

当館での活動は継続性があるため、各回ヘンテコなタイトルをつけ、展覧会のテーマにあわせたさまざまな鑑賞の切り口を設けています。一方、石見美術館では1度きりの活動となりますから、まずは「こども美術館部 in 石見」と題して、この鑑賞活動自体を広く知ってもらうことを目的にし、対象も小学生以上と幅広く設定しました。しかし子どもたちの象徴である「わかBee」は石見でも活かしたいと考え、和歌山の「わかBee」に倣って、石見の「いわBee」を作ることになりました。その姿にはやはり石見美術館らしさがほしいと、石見美術館の建築に特徴的な石州瓦を頭に載せてみたところ、これが思いのほかしっくりきたので、「わかBee」にも和歌山らしさをと、いつもの角帽に代えてみかんを載せました。二四(?)並ぶとなんともかわいらしい、兄弟キャラクターができあがりました。

この「いわBee」を、名札や鑑賞の道具に散りばめ、「こども美術館部 in 石見」のスタートです。まずは和歌山と島根の場

所を地図で確認しながら展示室に入り、第1章に並ぶ和歌山の風景を描いた作品を見ながら、和歌山がどんな土地なのかを考えつつ会場を進みました。

鑑賞作品として、最初に選んだのは石垣栄太郎の《人民戦線の人々》(1937頃)です。この作品では、画中の人々の衣服や持ち物を観察し、敵と味方の区別を試み、さらにいろいろなかたちの吹き出しを使って、それぞれの人物が考えていたことを想像しました(図1)。次の作品、村井正誠の《URBAIN No.1》(1936)は、鮮やかな色とかたちで描かれた抽象的な作品ですから、何を描いた絵なのかと想像すると、さまざまな意見が飛び出します。そこでこの作品をばらばらに分けてプリントしたものを使って、パズルのように床に並べながら、どこにどんなかたちが描かれているのかを注意して見ていきます。壁に掛けた作品と同じサイズなのに床に置くと大きく広がりを感じますし、上から見下ろすことで、航空写真を元にした作者の創作のきっかけへと自然に辿り着くことになりました(図2)。

後半は、白髪一雄の《地寮星 青眼虎》(1961)と宇佐美圭司の《還元 No.6》(1963)を題材にしました。前者の鑑賞では、貼りついた絵具の塊や飛び散るしぶきの様子からどうやったらこんな作品が作れるかを探りながら、黒々とした画面にもさまざまな色が含まれていることを観察したり、後者は画面に近づいたり離れたりすることで変わる見えかたの違いを確かめたりしました。全く違う表情を見せるそれぞれの作品が、実はほぼ同じ時代に描かれたことに目を向けると、作品同士の立体的な関係も見えてきます。



図1 吹き出しかたちも選びながら、画中の人物の声を考えます



図2 原寸大でパズルを組み立てます



2018(平成30)年5月13日(日)

最後に、展覧会の章立てである「5つの扉」にちなんで、「鍵穴カード」(図3)と名付けた作品カードを、くじ引きで参加者に選んでもらいました。このカードには展示作品の一部が、鍵穴を覗いて見えるようにプリントされています。部分的な手がかりから作品を探しあて、各自で鑑賞してもらいました。カードの裏に書かれている言葉も手がかりにしながら、自発的な鑑賞体験を目指したものです。

普段の当館での活動と違い、鑑賞の方には一貫性を持たせませんでしたが、参加者のみなさんは、その多様さを楽しんでくださいました。和歌山の子どもたちと比べて、少し恥ずかしがり屋にも思えた石見の子どもたちを前に、「あそこでもっとああすれば、みんなの気づきを引き出せたかもしれない」と反省することはたくさんありますが、他館での鑑賞活動という貴重な経験は、当館での活動を客観的に振り返るきっかけを与えてくれました。この場をお借りして、お礼申し上げます。

展覧会担当者の左近充直美さんは、ただ教育普及事業として鑑賞会を開くのではなく、活動のヒントを石見に持つて来ることが目的なのだと言って今回お声かけくださいました。作品を前にしていろいろな「遊び」ができると、それによって作品理解の幅が広がる可能性があることが、石見のみなさんに少しでも伝わっていればと思います。そして「こども美術館部」の活動が、そのままではなくとも、石見美術館に合ったかたちとなり、これからも「いわBee」が活躍してくれることを期待しています。(青木加苗)



図3 「鍵穴カード」には作品の一部しか見えません

# 「保存」の話をしよう。

## ⑤作品を動かすことについて

保存、というと、大切にとっておきさえすれば長持ちするだろうと思いませんか。でも、ひとつのものが、世代を超えて受け継がれていくためには、多くの人に大切だと思ってもらえることが必要です。美術館でも、実際に作品の保存をしている私たち学芸員だけでは、作品を守れません。そのために、展覧会という機会を設けているのです。

展覧会で、そのものを見た人が、これはいいなど感じるところから、それを他の人にも見てもらい、自分がいいなどと思った気持ちごと次の世代に受け継がれていくようにという想いが生まれると私は信じています。のために、作品を調査し、選び、展覧会を企画しているのですが、この展示という場面で必ず必要になるのは、その作品を保管している場所から運び出し、会場に展示するということです。

作品が無事に元の保管場所まで帰つてくるためには、さまざまなリスクを回避する必要があります。ものを運ぶ仕事は、私たちの生活を日常的に支えてくれていますが、美術作品の輸送はちょっと特殊です。

作品が、ほかのものに触れて物理的な損



一体どうやって運んだらいいのかわからないようなものでも、安全に運ぶ方法を編み出します



大きな鉄の彫刻作品も、布を重ね合わせて保護することになりました



作品にあわせた箱を作り、美術品専用車に積み込みます

傷を受けることから守る梱包、こまかに振動で長い時間をかけて壊れていくことを防ぐ美術輸送のための専用車両もありますが、いちばん大事なのは人間の手の働きです。

美術作品を動かすときには、美術作品の輸送のための訓練を受けた専門の人が作業を担当します。私たちは、どのような材料を使ってどう梱包するのか、どう展示するのか、そういった専門の人たちとひとつ話し合って決めていくのですが、その知識、発想、技術の高さに驚かされ、自分はその場で学び続けているといつも感じます。

展示室で、変わったかたちの作品を見つけたら、どこを持つか、支えるか、どのく

らいの力を入れられるか、そしてこれをどうやって梱包しようか、魅力的に展示しようかと想像してみると面白いかもしれません。

(植野比佐見)

## Museum Calendar

7.7(土)~9.2(日)

### なつやすみの美術館8 タイムトラベル

夏休み中にみんなで美術を楽しむ展覧会「なつやすみの美術館」。今年は作品を通して時間の旅へ出かけましょう。過ぎ去った昔や想像された未来が作品の中には留められています。作品の中の時間に飛び込みましょう。



吹田文明  
《銀河の創世》  
1982(昭和57)

9.8(土)~10.20(土)

### 和歌山一日本 和歌山から近代・美術、そして近代美術館を見つめる

和歌山の美術を見れば「日本」の美術がわかる。和歌山ゆかりの作家たちの作品で「日本」の近代美術が語れる。「地方から中央へ」の視点を、当館の珠玉のコレクションで構成、紹介します。



川口軌外  
《少女と貝殻》  
1934(昭和9)

4.28(土)~7.8(日)

### コレクション展 2018- 春夏

特集 庭園の眺め

高橋力雄の木版画

特集 滋賀県立近代美術館所蔵院展の画家たち II

8.4(土)~10.21(日)

### コレクション展 2018- 夏秋

特集 鈴木昭男

音と場の探求

特集 滋賀県立近代美術館所蔵院展の画家たち III

メールマガジン Facebook twitter ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。また Facebook や twitter でも、最新の情報をお伝えしています。あわせてご利用ください。



### 友の会 会員特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧
2. 各種行事への参加 (美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど)
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 版画の領布会への参加
5. 当館ミュージアムショップでの割引
6. 館内レストランでの割引

### 入会のご案内

一般会員 6,000円

学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。

詳しくは友の会事務局まで。

Tel. 073-436-8690 担当: 中川

